

3 最前線の島



萩原 夏樹
HAGIHARA Natsuki

対馬市観光推進部 / 博物館学芸課

その立地ゆえに、移動手段が限られていた近世まで、対馬は日本という国家の存立に関わる国境防衛の最前線であり続けた。なぜ、その歴史はこれほどまでに長く、そして激しいものだったのか？ 対馬が最前線の島として担っていた役割とは？

はじめに

日本列島と大陸の間に位置する対馬は、古代から交易や外交使節の船が行き交い、海上交通の要所として機能していた。その一方で、日本の国境でもあることから外敵の襲来を受けることもあり、周辺地域から日本への軍事侵攻が起こると最初に防衛にあっていた。本稿では、飛鳥時代から鎌倉時代までの歴史をたどりながら、対馬が「最前線の島」として担っていた役割を考えてみたい。

7世紀の東アジア情勢と対馬の防衛強化

7世紀初頭の朝鮮半島では高句麗・新羅・百済の三国が分立していた。日本は使節の往来を重ねて百済と親交を深め、百済と高句麗の間で戦争が起こった際は、百済に援軍を派遣している。しかし、628年に中国で成立した唐が朝鮮半島への侵攻を開始し、660年に百済は唐・新羅の連合軍によって滅ぼされた。百済の再興を目指す百済王の豊璋とその家臣を支援するため、日本は朝鮮半島に援軍を派遣する。663年8月には白村江（現大韓民国錦江）で唐・新羅の水軍と交戦するが大敗を喫し、百済の再興は破綻した。その後、唐は高句麗を滅ぼして遼東まで勢力を広げ、高句麗・百済の旧領を含む朝鮮半島は新羅によって統一された。こうした情勢の変化から日本

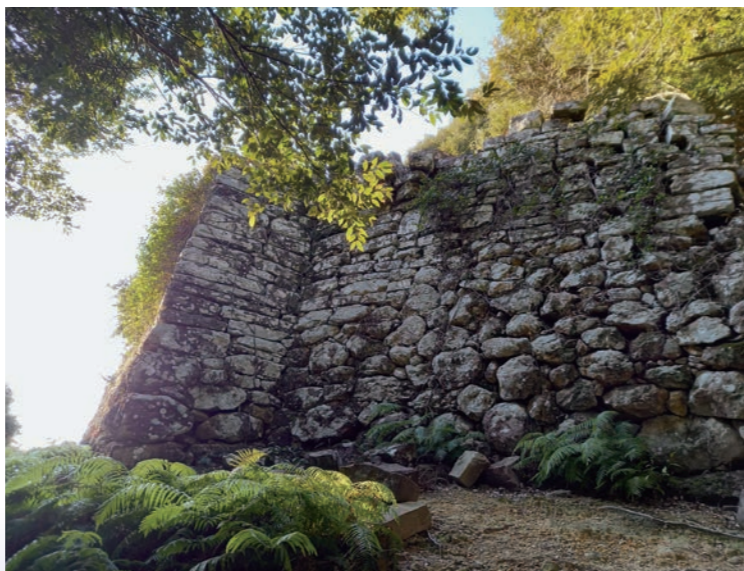


写真1 金田城跡 一ノ城戸

は唐・新羅の侵攻を警戒し、国内の防衛体制の整備を進めていく。

『日本書紀』の天智天皇3(664)年11月条によると、「対馬島・壱岐島・筑紫国（現福岡県）に防人と烽を置いた」との記述がある。防人とは辺境防衛のために諸国から動員された兵士であり、大宰府の防人司が統括していた。また、烽とは敵襲を知らせる警報施設であり、昼は煙を上げ、夜は火を焚くことで合図とした。防衛にあたる人員と緊急時の連絡手段を整えた後、天智天皇6(667)年には大和国（現奈良県）に高安城、讃岐国（現香川県）に屋嶋



写真2 金田城跡 二ノ城戸



写真3 金田城跡 三ノ城戸

城、対馬国に金田城が築かれた。現在も浅茅湾南岸に位置する城山に金田城跡が残る。北西面は傾斜の厳しい断崖だが、東南面は傾斜も緩く、3つの谷間に城戸と呼ばれる城門跡がある。また、城山の頂上から尾根に沿って石英斑岩を積み上げた石塁が走り、総延長にして約2.6kmに及ぶ。同時期に筑紫国や長門国（現山口県）に築かれた山城と同じく金田城も朝鮮式山城とされており、昭和57(1982)年には特別史跡に指定された。



写真4 金田城跡 東南角石塁

7世紀後半に中央集権国家の仕組みを整え始める日本が、対馬の防衛強化に積極的に関与したことは、防人の配置・金田城築城から見ても確かである。これは同時に、中央政権が対馬を国境の防衛拠点として把握していたことを推測させるものである。

度重なる外敵の襲来～新羅海賊・刀伊の入寇～

国防体制を整備する傍ら、日本は唐・新羅との外交交渉も継続し、遣唐使・遣新羅使の派遣を実現するほどまで関係を修復した。しかし、9世紀前半

から九州北部では新羅の海賊船が問題となり、対馬では弘仁2(811)年から海賊船の襲来が確認されている。『日本後紀』によると、同年12月6、7日に対馬の西海に新羅船が出現し、これらが海賊船と判明したため、対馬側は海賊の一部を捕縛し武器庫の守りを固めたという。この経緯を大宰府に報告したところ、新羅の言語を解する通訳と増援の兵士が派遣され、島内の要害には弩（大型の弓）が配備された。こうした防衛策が講じられる中、新羅海賊の



写真5 宗資国像(現対馬市厳原町小茂田浜神社)



写真6 宗資国らが元・高麗軍と戦った小茂田浜



写真7 小茂田浜神社

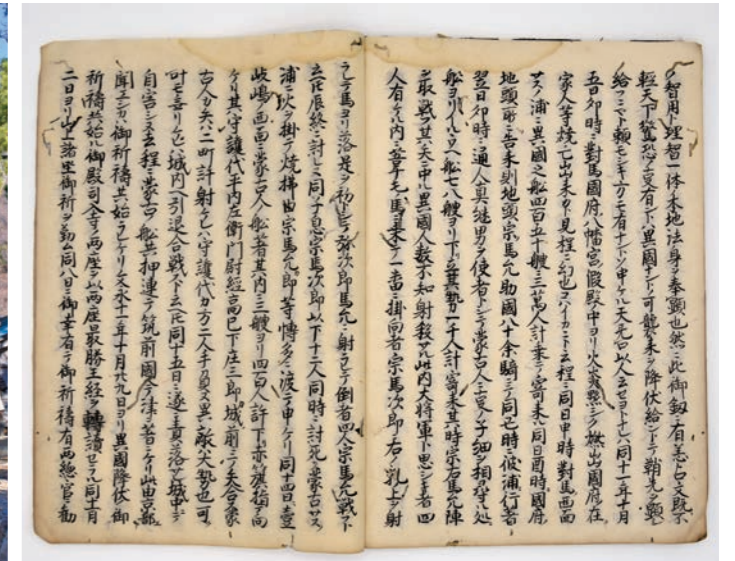


写真8 八幡愚童訓(対馬博物館所蔵)

被害は肥前国(現佐賀県・長崎県本土・五島列島など)小値賀島や筑紫国博多津にまで拡大し、寛平6(894)年に新羅海賊は45艘の船団で再び対馬に襲来した。『扶桑略記』によると、対馬島司(朝廷から派遣され、対馬の行政・軍事を統括する役人)の文室善友や郡司(主に地方豪族が任じられる郡の役人)等が軍を編成して防戦し、弩による攻撃で302人の海賊を討ち取ったとされる。8世紀以降、防人の派遣は縮小傾向にあり、対馬島司の指揮のもと、郡司や士卒といった現地の武力で対応することが求められていく。新羅海賊に対する防衛は、対馬島司・郡司等を中心とする軍事体制が機能した事例と位置付けることができよう。

しかし、11世紀には軍事を統括する対馬島司が対馬に赴かず、代わりに派遣した目代や郡司が非常時の対応を担うことが増えていく。こうした時期に対馬は中国東北部に居住する女真族の襲撃を受けた(刀伊の入寇)。『小右記』によると、寛仁3(1019)年4月に女真族の船団50艘余りが対馬に襲来し、殺害・放火・略奪に及んだという。この襲撃で殺害された者は上県郡で9人、下県郡で107人であり、連れ去られた者は上県郡で132人、下県郡で98人となっていた。また、女真族は牛馬199頭を「切喰」し、銀山の坑道も焼き払っており、対馬が深刻な被害を被っていたことがうかがえる。その後、女真族は壱岐と筑前国(現福岡県北西部)へ侵入し、対馬と同様に殺害・略奪等を行ったが、大宰権帥(大宰

府の長官)の藤原隆家が中央府の武士と共に迎撃し、その撃退に成功する。筑前国を追われた女真族は最後に肥前国松浦を襲撃するが、ここでも現地の武士の反撃に遭い、ようやく日本から撤退した。

刀伊の入寇後も中央政権が対馬の防衛に積極的に関与することはなく、対馬はいよいよ現地の武力を結集して敵襲に対処せざるを得なくなった。そうした中、鎌倉幕府による武家政治が幕を開け、日本全国に行政・治安維持を統括する守護が配置された。対馬にも守護の武藤氏(少武氏)に代わり大宰府の役人の惟宗氏が派遣される。この惟宗氏はのちに宗氏を名乗り、13世紀後半の元寇で対馬の防衛を主導する存在となる。

元・高麗軍の襲来と対馬の防衛

13世紀初頭に中央アジアやヨーロッパに勢力を拡大したモンゴルは、東アジア諸国にも攻勢をかけていく。新羅に替わって朝鮮半島を統一した高麗も、モンゴルによる9度の侵攻の末に降伏した。その後、元を建国したフビライ・ハンは、日本へ通交を求める使者を重ねて派遣したが、日本からは一度も返答を得られなかった。そのため、フビライは元と高麗の兵士から成る遠征軍を編成し、文永11(1274)年10月3日に合浦(現大韓民国馬山市)から出撃させた。元寇当時の対馬の関連資料はほとんど残っていないが、1度目の襲来(文永の役)については、現存資料からおおよその経過をたどることがで

きる。鎌倉時代後期の靈驗記『八幡愚童訓』によると、合浦を出撃した元・高麗軍は5日に対馬の佐須浦沖(現対馬市厳原町小茂田)に集結したという。対馬の守護代の宗資国は大宰府に急使を送ると同時に、武者80騎を率いて佐須浦へ急行した。翌朝には上陸した元・高麗軍と合戦に及ぶが、資国とその息子、家来たちは奮戦の末に命を落とした。その後、元・高麗軍は佐須浦を焼き払い、14日には壱岐へ向かったとのことである。元・高麗軍の襲来と対馬・壱岐での合戦は少武氏から鎌倉幕府へ報告され、同年11月3日に幕府は西国に領地をもつ武士たちへ共に防衛にあたるよう命じた。しかし、10月20日の時点で、少武氏や大友氏を中心とする九州武士たちは、博多湾西部から上陸した元・高麗軍と鳥飼・赤坂付近で交戦していた。翌21日には元・高麗軍も博多湾から撤退したため、幕府が防戦を命じた頃には文永の役も終結していた。

八幡愚童訓の記述から、宗氏一族が対馬の防衛主体となっていることは明らかであり、最初に外敵に立ち向かい、大宰府を通じて中央へ危急を知らせるという行動は、古代の防衛体制にも通じる部分がある。古代に対馬が担っていた「最前線の島」としての役割は、その主体を変えながら中世にも引き継がれたと考えられる。

なお、現在の対馬には元・高麗軍と戦った武士たちを祀る神社や墓が残る。例えば、厳原町小茂田には、佐須浦の戦いで奮戦した宗資国とその家来を祀

る小茂田浜神社があり、毎年11月には神事と弓射りを伴う大祭が行われる。また、厳原町の下原に御首塚、檜根に御胴塚と呼ばれる石塔があり、いずれも資国の墓と伝わる。この他にも元寇で戦死したと伝わる宗氏一族の墓が島内に点在し、厳原町椎根に宗右衛門三郎の墓、美津島町加志に宗越前五郎の墓、峰町吉田に宗甲斐六郎の墓、上対馬町比田勝に宗下野次郎の墓と伝わる石塔がある。これらの墓は南北朝・室町時代に建てられたと考えられるが、文献史料や伝承と同じく、対馬が直面した元寇を検討する上で必要な資料であることには違いない。

おわりに

元寇を経て対馬では宗氏が勢力を拡大し、15世紀には対馬全域を治めるまでとなった。島内の情勢が安定してからも、対馬は応永の外寇(1419年)や後期倭寇(15世紀後半～16世紀)といった外敵の襲来を受けており、これらの脅威には宗氏を中心とする島内の武士たちが対処していた。元寇以降も対馬は「最前線の島」として防衛の歴史を積み重ねていたと言えよう。

<参考資料>

- 1) 厳原町誌編集委員会『厳原町誌』第一法規出版株式会社 1997年
- 2) 佐伯弘次『<日本の中世9>モンゴル襲来の衝撃』中央公論新社 2003年
- 3) 瀬野精一郎・新川登亀男・佐伯弘次・五野井隆史・小宮木代良『鼎史42 長崎県の歴史』山川出版社 2012年
- 4) 永留久恵『対馬国志 原始・古代編 ヤマトとカラの狭間で活きた対馬』『対馬国志』刊行委員会 2009年
- 5) 永留久恵『対馬国志 中世・近世編 武門の興亡と対馬の交隣』『対馬国志』刊行委員会 2009年